

幼児に対する「しつけ言葉」の研究(10) アフォーダンスにおける道德性の獲得過程と環境デザインの試み

安見克夫

(板橋富士見幼稚園)

【はじめに】

幼児は道德性をどのような環境を通して発達的に獲得していくのか。生後まもなく養育者による躰から、基本的な生活習慣への他律的行動がはじめられ、そして社会化という発達過程を経て次第に自己の価値づけを軸に自律的道德として、その行動を規範化していく。

このため幼児期の教育について文部科学省は、道德性の形成について、発達特性を踏まえ環境を通じた直接的体験から獲得していくことが望ましいとしている。このことは幼児期の発達特性であり、幼児の認知発達の構造からみた道德性の形成過程は、幼児が社会化する過程「道德判断」という視点、つまり知的発達の側面を環境との交渉によって獲得されるとしている。その際、道德性の発達段階は6つの段階から構成され発達という現象について、その意味を2つの考え方から区分し説明している。一つは「学習」「獲得」という側面と「成長」「発達」という側面から捉えられている(1985,1987Kohlberg)。このことから我々は幼児期の躰の獲得に関し(幼児に対する「しつけ言葉」の研究:安見・村石・関口 1995-2003 保育学会大会)幼児の道德性の獲得過程について縦断的研究を行ってきた。本研究は、現代社会における幼児の躰の実態を明らかにするために、社会の躰に対する意識動向を諺や格言などの調査から省察してきた。その結果、大人達の殆どは道德性の基礎となる、幼児に対する躰や基本的な生活習慣の指導について、高い得点で「指導もしくは教えている」と回答している。しかし社会からの評価は反社会的事件のメディア報道と共に児童期の道德性の低下を指摘し、さらにはその芽となる幼児期の道德性の指導のあり方までを問うようになった。保育においても指導の低下を指摘しているのである。よって、前回までの調査から多くの教師や保育士は、幼児の道德性や躰の獲得に関する問いに対して家庭に問題があると指摘し、幼児の躰の獲得について「身に付いていない」と結論づけているのである。そこで、幼児期の道德性の形成過程(獲得-規範)は認知発達の側面とアフォーダンスによる、つまり周囲で起こる多様な性質との相補的な関係によってアフォーダンスされる行動から獲得される。そこで認知発達の側面(1985,1987Kohlberg)とアフォーダンス(1978, Gibson)

の2つの説に基づき、幼児がアフォーダンスされる多様な性質によって起こる、行動・思考・認知の発達過程から幼児がどのように道德性を見出していくのか環境のデザインのあり方を考察する。

【方法】

幼児の実態から遊びの型には3つのタイプが考えられる。一つは個人的な遊びであり、二つ目は個人が他者に応答しようとする個人的遊びである。そして三つ目は個人が集団の中に群れて遊ぶ遊びの型である。

今回は、個人が個人として遊ぶ姿の中と、個人が他者に応答しようとする個人的遊びの二つの要素が見られる、ザリガニの飼育水槽での直接的行動から「生命に関する尊さの実感」「他者に対する思いやる心」の育ちとなる道德性の形成過程を分析することとした。

期間 平成15年4月から平成15年12月

対象児 特定児4名と周辺での関わりを持つ幼児数名

場所 園庭に接しているザリガニ常設水槽 120cm × 60cm × 60cm

方法 週1回の数名の関わりが見られた時点で記録
環境 観察水槽には、前年1月に約1000匹の2mm程度の子を生む、4月には3cm程度に成長し、約20匹が成長を続ける。他に親10cmが4匹が生息する。水槽内は、ザリガニの隠れ家として煉瓦6個程度でサイトを組立、その穴を生息場所とする。水面は、浄化循環水が波打たないように配慮し、ザリガニの観察がしやすく配慮されている。ザリガニと水面までの距離は約30cmである。一部、水面近くに水棲植物がデザインされ自然的な環境が構成されている

事例 a 4月-7月 4A-1 2003.4.15 - 7.15

何気なくのぞき込む。5歳児 A 男が「あついた」 B 男「どこ」 A 「ここ」手を入れ腐葉土の陰にいたザリガニに B 男「でけえー」と歓声を上げ手を入れる。つかみ取ろうとするとザリガニはハサミをもたげ牽制する。A 男はびっくりしたように素早く手を抜く。B 男は、「すげえー、怒っている」と叫ぶ。 C 子がごっこ遊びのイチゴパックやボールを持ってくる。 A 男と B 男は、ボールやトレーを持ってくる。 C 男は数日前に広告紙で作った。剣を持って来てザリガニに挟ませようと試みている。 C 子はトレーを使って、子どものザリガニをボールに十数匹すくい取り A 男に

渡す。親ザリガニは今だ捕獲されない。水面がゆれていて思うようにサイトからおびき出せない。A 男は保育室から割り箸に毛糸やスランテープを巻き付けて持ってくる。ザリガニを釣ろうとしている。B 男毛糸やテープが浮いてしまう。「ねね、沈まないね」と、それを聴いていた C 男が粘土を持ってきて B 男に渡す。B 男と A 男は一緒にザリガニの爪に近づけつかませるが粘土が外れてしまう。保育者がクリップを渡す。釣れだすが水面まで。何度も繰り返す。/ D 男は大きいザリガニを素手で掴みあげる。E 男が「はさまれるよ」と注意する。周囲の子どもたちに近づける。周囲は逃げる。廊下に放す。ボールに戻す。/ 脱皮と遭遇する。横たわるザリガニに「死んでいる」と叫ぶ。3 歳児数名が驚く。しばらく動かない。死んだと思いき遊びが自主的に完全に一日停止した。その後脱皮と分かると遊びが再開された。5 歳児はどういうことかは理解しているようである。

事例 b 9 月 - 12 月 4A-2 2003.9.1 - 12.18

「餌、頂戴」と来るようになった。これまでは、さきいかを餌に釣っていたが、自分達で餌を上げ始める。3 cm だったザリガニは 7-8cm まで育ってきている。七夕の笹を竿にし麻縄を縛りクリップにさきいかを付けて、本格的釣り竿を、教師の発案で一緒に作り始める。釣れるようになった。毎日ザリガニ釣りがはじまり、ボールがすぐにいっぱいとなる。「そんなにいじったらかわいそうだよ」という声が聴かれる。「死んじゃうよ」と 3 歳児に注意する。次第に遊びが小さくなる。飼育意識が強くなってくる。毎日餌をあたえるようになってくる。10 月たまごを抱くザリガニを発見する。釣り上げようとする。ボールにすくい取る。群がって見る。「かわいそうだからやめな」という声が聴かれる。解き放す。3 歳児は、5 歳児がしていた釣り竿で、引き続きザリガニ釣りを夢中にやっている。その後は次第に、子どもが生まれるのを楽しみに餌を与え続け、11 月に入って、ザリガニ釣りをしなくなった。今は、飼育という活動の中で、観察を続け（大きくなっよ・脱皮した）共生している姿がみられる。

【考察】

- ・水槽の中に隠れているザリガニを発見する。好奇心が強く水面下のザリガニを必死に探す姿が連日続く。
- ・「捕獲」する心理が働きます。手を入れようとする。ザリガニの攻撃性の意外性と遭遇し葛藤する。一連の行動から対象のザリガニの習性や行動に触れる。
- ・ザリガニを捕獲するための様々な考えと行動が見られるようになってくる。互いの意図をくみ取りながら

「捕獲」という目的に向かって行動する様子がわかる。素手でつかみ取れないことから、釣り竿に近い竿を作ること紙巻きの剣をヒントに作り始める。また毛糸が沈まないことから「おもり」をつけることを発見する。・捕獲行為が釣る行為とすくい取る行為に二分化していく。・いたぶる行為から道徳性の芽生えとなる行為が生まれてくる。「死ぬ」「かわいそう」「止めろ」などが言葉として生まれ、やがて行動を規制していく姿が見られる。・3 歳児は、4-5 歳児の模倣活動を他律的に学び、その域から脱出しな姿が見られる。・4-5 歳児は、他律的行動（保育者から優しくと注意を受ける）からアフォードされ自律的な行動へと導かれている姿が見られる。・アフォードダンスは、幼児の知的さを刺激し、環境からのアフォードによって、様々なスキルを獲得していく姿がみられる。

【まとめと課題】

幼児はザリガニという飼育活動を通して、さまざまにアフォードされる。環境からの能動的な働きかけによって相補的に様々な行為を見出す（捕獲に向けた行為）。その行為を通して、道徳性の芽となる体験を積み重ねていることが考えられる。しかし、発達によって他律的道徳性の中でアフォードされる場合（3 歳児や 4 歳児は 5 歳児からの言動と行為の模倣）と、自律的道徳性の中でアフォードされる場合（5 歳児の捕獲行為）とは、幼児自身のアフォードダンスは異なる。幼児が一つのザリガニという対象からアフォードダンスにガイドされたさまざまな行為は、認知的発達の側面から見たとき、行為を学習し自律的道徳性として自己規範化に導く姿が見られる（いたぶる姿を見て注意する）。従って幼児期の道徳性の発達援助は、幼児が社会化されていく過程で他律的に関係づけられた行為（動かないので死んでいる）を絶対的なものとして受け止めてしまう傾向がある。こうした他律的道徳性を通して、社会化の発達に伴い幼児は環境からアフォードされる様々な行為を通して自律的道徳性を形成していくのである。このことから、単に保育室で水槽にザリガニを飼うという環境下で餌を与える飼育行為を他律的に指導するよりも、幼児のアフォードされる多様な可能性を配慮した環境のデザインが大切となる。その際、当然発達過程をも考慮していく必要があると考えられる。

参考文献

佐々木正人編 「アフォードダンスと行為」 2001 金子書房
永野重史監訳 「コールバーグの道徳性の形成」 1985 新曜社 他